祝 日本遺産認定

かさましこ

KASAMASHIKO
Japanese Heritage Certification

兄弟産地が紡ぐ〜〝焼き物語〟

市では、令和元年度から「日本遺産」認定を目指して、益子町と共同で「焼き物文化（笠間焼・益子焼）」を中心にストーリーを作成し、令和2年1月に文化庁に申請しました。6月12日に「日本遺産審査委員会」の結果が通知され、6月19日に認定が正式発表となりました。今回は、認定となったストーリーと、今後の展望について特集し、ご紹介します。

笠間焼を生んだ窯元／久野陶園

笠間市と益子町は県道1号線を経由して車で30分。ものづくりのわざと心が息づく焼き物産地です。

「かさましこ」の美意識

関東平野の北部に位置する笠間市と栃木県益子町＝「かさましこ」。八溝山地鶏足山塊の山々を挟んで近接するこの地は、古代から須恵器づくりに必要な粘土・水・燃料の木材に恵まれていました。8世紀〜10世紀頃の古代窯跡からの出土品に共通した技法が多数みられることから、同じ技術圏にあったことが分かっています。11世紀に下野国（現在の栃木県）を拠点とし、その後の約500年間、笠間と益子の地を治めた宇都宮氏は、武士としての面貌にとどまらず京都の貴族との接点を持ちながら宗教・文化という側面に大きな足跡を残しました。浄土庭園を持つ寺院や、当世を代表する仏師に作らせた仏像等から京都の影響を受けた信仰心の篤さを見ることができます。また、京都・鎌倉と並ぶ日本三大歌壇のひとつに数えられた宇都宮歌壇を作るなど、文化の馨りがこの地に届いていることがうかがえます。この時代に「かさましこ」にもたらされた京都・鎌倉からの文化・芸術・気風は、後の笠間焼・益子焼の美意識に影響しています。

兄・笠間焼と弟・益子焼の誕生

16世紀後半、江戸時代になると2つの地域はそれぞれの歴史を歩むこととなります。

しかし、18世紀後半、笠間藩箱田村の名主久野半右衛門（くのはんえもん）が、箱田村で焼き物（後の笠間焼）を始めます。そして19世紀後半、箱田村鳳台院で寺子屋教育を受けていた大塚啓三郎（おおつかけいさぶろう）が、久野窯で焼き物作りと出合い陶器の製法を修業し、益子で築いた窯が益子焼の始まりとなります。8世紀に同じ技術圏で窯を築いていた2つの地域が、1，000年後、また製陶を通じて同じ未来に向かって進み始めたのです。

明治時代になると笠間・益子それぞれで組合が設立され、笠間焼と益子焼の特約を結んで出荷規格を統一し、連携して関東の窯業地として発展しました。そして明治時代から大正時代にかけて、壺、水甕、すり鉢、土鍋などの日用品を製造出荷し、丈夫で使いやすく、安価であったことから東京を中心に東日本全域にまで販路を大きく拡大することに成功しました。

JAPAN HERITAGE

日本遺産

笠間稲荷神社

鳳台院山門

笠間の陶炎祭

日本遺産とは

地域の歴史的な魅力や特色を通じて文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産」として文化庁が認定する制度。ストーリーの構成要素となる魅力ある文化財群を総合的に整備・活用し、国内外に発信することで、地域活性化を図ることを目的としています。2020年度までに104件が認定されました。

KASAMASHIKO Japanese Heritage Certification

「かさましこ」陶芸に訪れる作風の変化

「かさましこ」窯元の順風満帆な経営は長くなく、産業発展と生活様式の変化で、生活の危機を幾度となく迎えます。そうした中、それぞれの焼き物に作風の変化が起こります。

最初に新たな風が吹いたのは益子です。昭和初期に手仕事に宿る美を見いだす民藝運動が拡がり、後に人間国宝となる濱田庄司（はまだしょうじ）を中心に、職人気質の窯業地で、芸術性の要素が加わった民藝調の陶器（民藝陶器）が作られるようになりました。昭和20～30年代になると、民藝運動の拡がりは窯業にとどまらず、染織、木工、金工等の職人たちにも伝わりました。職人たちの気取らない素朴ですこやかな心と、伝統に裏打ちされた確かな技術から、時代に合わせた新たな作品が次々と生み出されました。益子参考館を訪れれば、濱田庄司が制作のヒントにと集めた世界中の工芸品と民藝のある生活感があなたを出迎え、五感が洗われるような、すがすがしさを体感できます。

一方、笠間は、戦後、茨城県が窯業指導所を設立し、デザイン性を重視した工芸陶器への転換を目指して釉薬改良や粘土研究、デザイナー等による指導が行われました。さらに、県内外から才能ある陶芸家を招くために、官民協力の元、造った窯業団地や笠間芸術の村には、陶芸家の他、絵画や彫刻、鋳金、染色、織物等の芸術家が移住し、地元の窯元、陶工と互いに刺激し交流を深めました。こうした中で斬新な表現と技法が生まれ、後に人間国宝となる松井康成（まついこうせい）は「練上」という技法で笠間焼を芸術の域にまで高めました。また、笠間稲荷神社も仲見世や門前町などで笠間焼を販売したり、歴史的資料の保存・公開のために境内に美術館を建てたり支援を行ったのです。

陶文化を創造、進化する「かさましこ」

「かさましこ」の街並みには四季を表現する雅な陶壁、散策路にはリズムを生み出す波型の陶板タイルなど、日常の中にアートが溶け込んでいます。工房を訪れると、陶芸家が土と向き合う真剣な姿と電動ロクロが回る音が響く、凛とした雰囲気を感じることができます。

かつて暮らしを支える日用品を製造していた「かさましこ」は、デザイン性や機能美を追求したうつわや親しみやすいオブジェなどを制作し、暮らしに潤いを与える窯業地へと進化しています。時代の需要を敏感に感じ取り、変化をいとわない産地の挑戦が表現の多様性を育んでいます。そんな陶の郷を求めて全国から陶芸家が集まり、今では６００名を超えるまでになりました。自由で開放された制作環境を体感（見学）できるオープンアトリエや、窯元や陶芸家の指導によるロクロや手ひねり等の体験を通じて作り手の想いや技に触れることができます。販売店やギャラリー、カフェ、レストランが軒を連ね、うつわや生活雑貨、オブジェなどの美しい生活造形が食卓や空間を彩り、訪れる人の五感を楽しませてくれます。互いの地域の陶芸家が合同で個展を開いたり、東日本大震災で崩壊した濱田庄司ゆかりの登り窯を復活させたり、全国の陶芸家たちが一緒に窯焚きを行ったりと、絆を深めています。そうして兄弟焼き物の笠間焼・益子焼はつながり合って、暮らしに寄り添う独自の陶文化を醸成しています。

笠間工芸の丘の登り窯

左から飯田市議会議長、山口市長、益子町の大塚町長、星野町議会議長

KASAMASHIKO
Japanese Heritage Certification

共同記者会見

6月22日(月)、益子町の陶芸メッセ・益子で日本遺産認定を受け笠間市と益子町が共同記者会見を開催しました。

最初に日本遺産認定を祝いセレモニーが行われ、両市町長および両議会議長が参列し、くす玉が割られました。

共同記者会見では、日本遺産となった焼き物を軸としたストーリー「かさましこ～兄弟産地が紡ぐ〝焼き物語〟～」について今後どのように連携していくのか、両市町長がコメントされました。

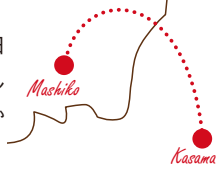
また、認定を祝い横断幕をかさま歴史交流館井筒屋に、市庁舎には懸垂幕をそれぞれ掲げました。

益子町長コメント

今回、茨城県・笠間市とともに共同申請したのは、「かさましこ～兄弟産地が紡ぐ〝焼き物語〟～」。 物語は、8世紀の須恵器の技法から始まります。益子町には「中世の文化財」として宇都宮家に由来するものが多く残りますが、益子も笠間も当時は宇都宮の血族。時代とともに関係が希薄になりながらも、江戸時代末期に「焼き物」を通して再び新たな関係が生まれ、以来様々な交流が続けられてきました。

中世の文化財を始め、このストーリーを構成する施設などが日本遺産の構成要素。これから「日本遺産を巡る旅」として準備をしてまいります。1,000年を超える先人たちに想いを馳せながら、「かさましこ」の旅を楽しんで頂きたいと思います。

これまで歴史を紡いでこられたすべての皆さんに心から感謝申し上げます。これから笠間市の皆さまとともに、新たな魅力づくりをしながら「焼き物語」を紡いでいきたいと思います。



笠間市長コメント

このたび、笠間市と益子町が共同申請したストーリー「かさましこ～兄弟産地が紡ぐ〝焼き物語〟～」が日本遺産に認定されたことは、大変名誉なことであり心から嬉しく思います。

今回の認定は、お互いの地域で焼き物文化を継承・発展させ、陶工の技法を脈々と引き継ぎ守ってきた、焼き物の伝統・文化が高く評価されたことによるものであると思います。

これまで伝統を守り続けてきた方々、そして、申請に向けてご尽力いただいた関係者の皆さんのご協力に心から感謝申し上げます。

笠間焼は、江戸中期に現在の箱田地区に久野半右衛門が築いた窯が起源であるといわれ、型にとらわれることなく、個々が才能のおもむくままに新しいものを生む創造力を発揮できる、一期一会の奥の深い焼き物です。

これらも、益子町とともに焼き物の兄弟産地として、まちづくりをしっかり進めていきたいと思います。

日本遺産にまつわる見どころスポット

KASAMASHIKO Japanese Heritage Certification

笠間 久野陶園

笠間市箱田1804

安永年間（1772～1780）、信楽の陶工・長右衛門の指導により久野半右衛門道延が窯を築き、陶器を焼いたのが笠間焼の始まりとされています。久野陶園は益子焼の陶祖である大塚啓三郎が陶芸を学んだ窯元でもあり、益子焼と深いつながりがある場所です。工場内には歴代の職人たちが使っていた道具が多く残っていて、その中でも現存する「ベルト式動力ロクロ」が見どころの1つです。

※来園の際は要予約｜問い合わせ 久野陶園 080-5016-6966
生涯学習課（内線 260）

益子 西明寺

益子町大字益子4469

天平9年（737）創建と伝わる古刹で、国指定文化財の三重塔・楼門・本堂内厨子をはじめとした中世～近世の数々の文化財が所在します。宇都宮氏と家臣益子氏の庇護のもといまに伝わりました。境内には全国的にも珍しい「笑い閻魔」として親しまれる木造閻魔像が伝わるほか、益子焼の陶祖である大塚啓三郎の碑が建てられています。

本堂内見学 300 円｜問い合わせ 西明寺 0285-72-2957

笠間 笠間城跡

笠間稲荷駐車場より徒歩20分（笠間市笠間1014）

承久元年（1219）に笠間時朝が佐白山周辺に築いた山城跡であり、中世は笠間氏、近世は笠間藩主の居城として機能しました。江戸時代、笠間藩主・牧野貞直のときに久野陶園等を御用窯とし、歴代藩主は笠間焼の産業振興に努めました。地形は昔のまま残されていて、土塁や曲輪、空堀、石垣等を見ることができます。山頂に立つ佐志能神社の拝殿は、二層の天守櫓を改造したもので、当時の材料をそのまま使用しています。

※一部立ち入り禁止区域あり｜問い合わせ 生涯学習課（内線 382）

益子 益子参考館

益子町大字益子3388

民藝運動の中心人物で陶芸家の濱田庄司が居住・作陶等に利用した建物を活用した民藝館です。濱田が蒐集した世界各国の民藝品や濱田と交流のあった人物の作品が展示されています。構成文化財の上台や細工場、登り窯などがあり、民藝の趣向をこらした意匠の建物や調度品の数々を見ることができ、全身で民藝のすがすがしさを体感できます。

問い合わせ 益子参考館0285-72-5300
入館料 大人800円、子ども（中・高生400円）

今後の取組み

日本遺産認定を契機に、両市町の経済や文化財等の関連団体から構成される「かさましこ日本遺産活性化協議会」が7月31日に設立しました。今後は協議会が主体となり、文化庁の補助事業を活用しながら事業を推進していきます。

今年度の活動としては、日本遺産制度の認知向上や、地域の歴史や文化財への理解を深めるとともに、地域活性化のための意識高揚を目的としたシンポジウムを開催します。

また、インバウンドを意識した多言語看板の設置、文化財を紹介・案内するホームページやパンフレット等の情報発信媒体を制作し、文化財を周遊する観光客の利便性向上に努めます。

加えて、日本遺産ブランドを活用したツアーの企画や商品開発を目的としたセミナー及びワークショップの開催、自転車周遊マップの作成のためにGPSを搭載したレンタサイクルによる観光周遊実態調査など、令和3年度以降に実施する事業の効果を高めるための基盤整備を行っていきます。

令和3年度以降は、調査や整備をもとに、ガイド・コーディネーターの育成、着地型旅行商品や日本遺産関連商品の開発促進、「かさましこ」ブランド向上のためのプロモーション活動など、笠間市に経済効果をもたらすものを計画しています。

将来的には、さまざまな地域資源を最大限に活かした回遊性の高い観光スタイルを定着させ、イベントに依存することのない通年型観光の確立を目指します。

【問い合わせ】生涯学習課（内線260）